熱延レベラー加工のパイオニア

村山鋼材が創立70周年

村山 和雄社長・村山 雄星執行役員に聞く

右手前が村山社長、左奥が村山執行役員

独立系熱延コイルセンター（CC）大手の村山鋼材（本社・千葉県浦安市）が1952年（昭和27）10月20日の設立から丸70年を迎えた。先代・故村山文雄氏が個人商を興した42年3月から数えると80年。この間、幾多の景気浮沈と業界を取り巻く需要構造変化の中で自主独立路線を貫き「厚物・広幅・長尺」を武器に独自の地位を築いてきた歩みを振り返るとともに、次の節目への展望を村山和雄社長と村山雄星執行役員に聞いた。（太田 一郎）

「守成」想い、自主独立貫く

SDGs、DXは「長期視野で」

――70年を振り返る

村山社長 今日を迎えられたのも、長年の取引先・顧客はじめ多くの関係者はもちろん、会社の基盤をつくってくれた先人、そして社員たちのおかげ。深く感謝したい。

――節目を迎えて。

村山社長 先代である父・村山文雄が42年間、創業社長として経営を担い、その死去後、私が2代目を継いだ。実は、私には兄・敏雄がおり、家業を継ぐ長男としての道を歩んでいたが学生最後の夏休みに不慮の事故に遭い、22歳の若さで他界した。父の無念は計り知れなかったと思う。70年が経過する中で世代交代も進み、今や父と兄を知る社員も少なくなった。その存在を忘れぬよう、浦安工場の事務所には二人の肖像画を並べて飾ってある。

――市場環境の変化に対して。

村山社長 事業面では厚物・広幅・長尺加工を手掛ける唯一無二の熱延コイルセンター（CC）としての存在感に磨きをかけ、品質・技術・コスト競争力を強化しつつ会社としては自主独立を貫き、コンプライアンスをはじめCSRを全うしながら環境配慮、人財教育、危機管理、BCPなど企業経営に必要な要素を踏まえ、多様化する社会情勢に対応していく。その中でSDGsやITデジタル化（DX）対策も必須だ。長期視野で取り組むため、次世代を担う若い力にその推進を託し、具体的に着手した。

若くして亡くなった敏雄さんの肖像画

――その旗振り役に村山雄星執行役員を充てた。まずはSDGsについて。

村山執行役員 目的は目標を含めた具体項目を決める運びです。

――DXへの対応は。

村山執行役員 堅苦しく構えず「自分たちの仕事が楽になり、人的ミスや作業のムダが減って時短できる」との認識に立ってまずは効率化できることからデジタル化を進めます。クラウドを活用して業務フローを可視化・共有化し、誰もが作業代替できるよう「事務の多能工化」を図りたい。その上でDXの範囲を広げ、取引先との連携を模索しメーカー・商社・CCにおいて素材進ちょくなどモノの流れを一元管理できないかなどサプライチェーン強化につなげられればと思っています。

――次の節目に向けて。

村山社長 中期計画に基づき1年1年の事業課題をクリアしながら成長を重ね80年、90年、100年…と歩を進めていく。私自身は、創業者が苦労と努力の上に築いた基盤をさらに強固にすべく「守成」の想いを忘れず経営に精励する。父は信念と情熱をもって道なき道を切り拓いた挑戦者であり、それを成し得たのも健康な身体と健全な精神があったから。「健康は誰も与えてくれない、自分でつくりあげるもの」が父の持論であり、私も同感だ。から健康管理には万全を期している。ただ、私も70歳を過ぎ、若い世代も育っているので早い時期に3代目にバトンを託したい。

――その旗振り役に村山雄星執行役員を充てた。まずはSDGsについて。

村山執行役員 目的は目標を含めた具体項目を決める運びです。

――DXへの対応は。

村山執行役員 堅苦しく構えず「自分たちの仕事が楽になり、人的ミスや作業のムダが減って時短できる」との認識に立ってまずは効率化できることからデジタル化を進めます。クラウドを活用して業務フローを可視化・共有化し、誰もが作業代替できるよう「事務の多能工化」を図りたい。その上でDXの範囲を広げ、取引先との連携を模索しメーカー・商社・CCにおいて素材進ちょくなどモノの流れを一元管理できないかなどサプライチェーン強化につなげられればと思っています。

――次の節目に向けて。

村山社長 中期計画に基づき1年1年の事業課題をクリアしながら成長を重ね80年、90年、100年…と歩を進めていく。私自身は、創業者が苦労と努力の上に築いた基盤をさらに強固にすべく「守成」の想いを忘れず経営に精励する。父は信念と情熱をもって道なき道を切り拓いた挑戦者であり、それを成し得たのも健康な身体と健全な精神があったから。「健康は誰も与えてくれない、自分でつくりあげるもの」が父の持論であり、私も同感だ。から健康管理には万全を期している。ただ、私も70歳を過ぎ、若い世代も育っているので早い時期に3代目にバトンを託したい。

70年の歴史 振り返る

村山鋼材のホームページ（mks-gr.co.jp）を開くと「伸ばす、切る、日本一」のフレーズが眼に入る。「熱延コイルの厚物・広幅・長尺シート加工」は同社の代名詞。その象徴が大型レベラー設備「ジャンボ・カッティングライン1号（JCL1）」であり現在、浦安工場で最大板厚25㍉、最大幅2・5㍍、最大製品長さ12・3㍍までのカットシート生産を日々手掛ける。

藤澤鋼板と「協業」開始

70年の歴史を紐解けばエポックメーキングな出来事がいくつも挙がるが、2011年12月に同じ独立系熱延CCの藤澤鋼板（藤澤鐵雄社長）と「相互設備集約・加工協業」で締結し、それまで両社で計5ラインあった大型レベラーを3ラインに削減した一件は、業界が抱える構造的な設備能力過剰問題解消に一石を投じたオーナー経営者同士の英断と評価され、広く業界の注目を集めた。

「薄物加工は藤澤、厚物加工は村山」で棲み分け、今も双方のトップ同士から現業まで良好な人的関係のもと協業体制を持続している。

熱延CC事業を主軸に薄板販売、倉庫事業の3部門が有機的に結合し、補完・サポートしながら会社が目指す全体最適化の実現に向け「事業トライアングル」を形成。また、直パネル4千枚強を敷き、年間523㌧におよぶCO_2削減に貢献する。

CSR、BCP、人財育成

同社は以前からCSR（企業の社会的責任）を強く意識して組織運営してきた。環境経営については、今年5月に「SDGs推進委員会」を発足。専門アドバイザーの指導を受けながら具体的な定量目標を定め、カーボンニュートラルにつながるグリーン鋼材の調達・提供を目指す。地域社会貢献活動では近隣学校の工場見学受け入れも定着。「未来の鉄鋼人」の可能性を秘めた子供たちに鉄の加工現場に触れてもらい、モノづくりへの興味・関心を深める意義は大きい。

浦安倉庫では各種コイルや厚板の保管と入出庫業務を展開。岸壁付きなので海上輸送による環境対策に加え、震災など有事の際の陸上輸送困難時の緊急輸送手段として活用できる利点もある。13年秋には筑波奥原工業団地内（茨城県牛久市）の自社所有地約1万4千平方㍍で大規模メガソーラーを開設。太陽光パネル4千枚強を敷き、年間523㌧におよぶCO_2削減に貢献する。

2012年に浦安工場に設置した改良版JCL1

岸壁付き鋼材倉庫（浦安第1鉄鋼団地内）

「レーザ切断用鋼板」開発

今の時代に求められる企業経営の要素を採り入れながらも70年間、変わらず愚直に続けてきたのが「加工技術向上への挑戦によって顧客ニーズに応え、競合他社との差別化を図る」こと。オリジナル商品「レーザ切断用鋼板」の開発・商品化はその集大成だ。

日本製鉄（当時＝新日鉄）出身の技術スタッフの支援のもと独自研究を重ね、コイルの内部残留応力を除去・均一化する最適レベラー加工条件を数値化。二次加工時に反りや歪みが発生しない塑性調整技術（特許）を生み出した。その独自ノウハウを、難度が高くシビアな精度が要求されるレーザ切断に対応し得る高品位シートとして商品化し、幅広い需要分野で重宝されている。

国内高炉大手が厚板構造改革の一環でミル能力を削減し、結果的に生産負荷の高い薄物のコイル化シフトが想定され、そうなれば村山鋼材の出番が否応なく増える。その責任を果たすべく、JCLの品質改良を推し進めていく方針だ。今年8月にはJCL1の姿勢修正装置を更新。カットシート製品のパイラー落下時のスリキズを防ぎ、品質向上につなげている。能力的には2ラインで年産20万㌧（月産1万7千㌧）超を目指す。

茨城・牛久の自社所有地に開設した太陽光（メガソーラー）発電所

〝突破力〟で目標達成

10月から新たな期（71期）に入った。前期から着手した3カ年中期経営計画（21年10月～24年9月）の2年目でもある今期は「会社・組織・個々人の目標クリアに強烈な願望を持ち、達成するまで諦めずにやり抜く突破力」が全社共通の課題。年度計画で掲げた①経営基盤確立②事業効率改善③人財育成④SDGs推進―といった個々のテーマをひとつひとつ突破することで「MURAYAMAブランドをより強固にしよう」と村山社長自らがハッパをかける。

その先に見据える100年企業に向け、まずは次の節目である80周年到達を目指す。スローガンに掲げた「お客様と共に歩む〝トップクオリティを誇るコイルセンターになろう〟社員全員の成長と幸福を実現するために」の実践に向けて。

挑戦意欲と開拓精神の持ち主

創業者 故村山 文雄氏

JCL開発、厚板市場に〝風穴〟

創業者・故村山文雄氏（享年76歳）は1918年（大正7）、新潟県松之山町（現在の十日町市）の旅館業の次男に生まれ、12歳で上京。生来の技術・機械設備好きで、京浜地区のモノづくり現場で丁稚奉公した際に「鉄」に触れたのが起業のきっかけとなった。

42年（昭17）3月、大田区森ケ崎で旧軍需工場の材料を集めて客先の求める寸法に剪断する個人商を興す。24歳での独立だった。10年半後の52年10月20日、前身の村山鋼材を設立する。

高度経済成長期に当時の富士製鉄（現日本製鉄）室蘭で初めてコイルの連続切断設備を目の当たりにした先代は、傍らに山と積まれた発生コイルを見て「これを何とか加工できないか」と思案。真冬の現場で2日間かけてスケッチし、そのイメージで設備メーカーに模造のラインを造らせたのがレベラー加工への第一歩だった。

その後、持ち前の挑戦意欲と開拓精神で創意工夫を重ね、大型レベラーによる鋼板塑性技術を開発。レベラー3C）業のパイオニアでもある。

74年（昭49）の原型である。に旧東京工場で操業し、その改良版が今、浦安工場で稼働する。

わが国コイルセンター（C）業界のリーダーとして全国CC工業組合の初代理事長に就任。草創期を指揮した。業界地位向上を目指して適正加工賃確保に奔走。その活躍ぶりは、地域に根ざすシャー・プレス板金・製作所などエンドユーザー向けにきめ細かく対応する。

基を組み合わせ平坦度の優れた高品位カットシートを可能とし、それまで厚板の独断場となっていた市場に風穴を開けたのが、ジャンボ・カッティングライン1号（JCL1）を、人は敬意を込めて「ミスター加工賃」の異名で称賛した。

本業ひと筋に、独自技術をたずさえ事業発展を全う。そのDNAを2代目・村山社長に託した起業家としての半生が、死去後に発刊した『燃ゆる生涯』に詳しく記載してある。

おかげさまで70周年

本年10月20日、弊社は70周年を迎えました。

これもひとえに皆様のご支援の賜と深く感謝しております。

これからも全社一丸となって、お客様と共に歩むコイルセンターを目指して参ります。

今後も変わらぬご厚誼の程、お願い申し上げます。

代表取締役 村山和雄

MURAYAMA 村山鋼材株式会社

本 社：〒279-0012 千葉県浦安市入船1-5-2 プライムタワー新浦安15F TEL:047-305-8008（代）

事業所：厚板営業部・浦安工場・浦安倉庫・薄板営業部・西東京営業所・神奈川営業所

https://mks-gr.co.jp